



「私は20人近くの特攻隊兵を見送ったが、『お父さん』と言って飛び立った兵隊は一人もいなかった。全員が『お母さん』と言って飛び立った」とは、元特攻隊兵の証言である。私はその時、「一番機は『お母さん』」と言ったので、2番機、3番機の兵隊もそれにならったのだらう」と思った。だが、

特攻隊指揮官の手記に「彼らは明日から飛び始める。最後の夕飯を食べた彼らは海岸へ出て、たぶん自分の故郷である方角を向いてこう叫んだ、『お母さん』とあった……」あなたもランドセルを背負って小学校から帰って来た時のことを思い出して欲しい。「お母さん、ただいま！」ではなかったか。父は仕事で外出していたことだろう。或いは「十月十日・つきとうか」との言葉もある。やはり、お母さんには、かなわない……。「母の歳、越えて母の夢を見る」とは85歳の男性の詩。やはり、お母さんには、かなわない。■今回は、母への思いを綴った4人の文章を紹介したい。

私はお母さんみたいな母親になれますか？

お母さんへ

お母さん 台所に立つとあなたが横に立っている気がします。

お母さん 洗濯物を畳んでいると、ずぼらなわたしに「ほらもっとキレイに畳まない」と言うあなたの声が聞こえる気がします。

お母さん 泣いていると「ほら、おいで」と撫でてくれる気がします。もう2児の母だということに、あなたが死んだことをどこか受け入れられません。お葬式で3歳の長男が「早く起きないかなあ」なんて言うから、弔問者に挨拶



母の日は昭和66年、父の日は昭和56年から始まり、赤いカーネーション、また黄色いリボンをそれぞれに送るという風習がある。

お母さん 拶しなればいけないのに涙が止まらなくなりました。あなたがほとんど会話なんて無かったお父さんはお礼の挨拶で、言葉を詰まらせ書いてある文章を読むことも出来ず、必死で言葉に出来たのは、「ありがとうございました」だけで済んだ。

お母さん さよならするのなら、もっと覚悟をしたかった。「具合が悪い」と言い、入院してたった8日で逝かれたらどうしようもありません。まだ下の子は、生まれて2カ月ですよ。もつともつと抱っこしたかったです。 私はお母さんみたいな母親

アンヨタイ

脳梗塞を患い、半身に痺をかかえ、リハビリに専念するも、最終的に施設にお世話になり、ギリギリまで杖をつきながら頑張つて歩いてきたものの、ついに車いすの生活になった母。見舞いに行くと、当時姑と同居していた私に、「こちらに来てお母さん、帰ってもバネ」と、申し訳なさそうに言っていた母。

しかし、まもなく歩行というものがいかに人間の脳に影響があり、大切なことなのかを、つくづく知ることになる。急に認知症が進んだのである。そんなある日のこと、突然母が昔を懐かしむように語り出した。

「駅までお買い物に行つた帰り道、もう歩くのがいやになつたあなたがだっこしてもらいたくて、足が痛い」を『アンヨタイ、アンヨタイ』って言うの。しょうがないわねって、だっこしてあげたら、も

「次の角を左に曲がって！ 私の家だから…」

母の記憶

母が亡くなつて昨年末で13年になる。そんなになるんだなあ、と思いつつ、母が生きていたときは、月に2回ほどは新幹線や夜行バスを利用して帰省していた。母がいなくなつたことで、郷里の秋田へはお盆や彼岸の日に行く程度に減つてしまった。母に申し訳ない気持ちがある。私は東京で働いていたので、母は寒い北国でひとり暮らしで暮らしていた。元氣な人だったが、

ただに認知症のきざしが表れたため、市の福祉課に相談して、ヘルパーさんの家庭訪

編集後記

◆「私が決して滅ぼされることのないようにと希うひとつの民族がある。それは日本民族だ」とは、昭和初期に駐日フランス大使を務めた詩人、ポール・クロードの言葉。同じ頃、日本に50日間近く滞在したアインシュタインは「純粋な心は、他のどの人々にも見られない。みんながこの国を愛して尊敬すべきだ」「日本人は今まで知り合つたどの民族よりも気に入っています。物静かで、謙虚で、知的で、芸術的センスがあって、思いやりがあって、外見にとらわれず、責任感があるのです」「簡素で上品で、農家やその他の質素な日本家屋を見たが、すべてがぴかぴか。羨がしくて愉快な大勢の子供たち」と絶賛。以上、発行草思社「アインシュタインの旅行日記」から。

母の涙

うケロッとしてキヤツキヤツと喜んでね。かわいかった。それからまもなく、母は私が娘であることが、わからなくなつた。たわいない生活の中のほんの一角。でも、私にとって母からの、最後の最高の贈り物になつた。母亡き今、懐かしい故郷のあの江ノ電沿いの道を、母に抱かれて、キヤツキヤツと喜んでいる自分の姿を想像しながら、私は、今でもときどきつぶやいてみる……。 「お母さん、アンヨタイ」

橋本三枝子(70) 東京都世田谷区(産経新聞)

ご飯を作らないといけないから家に帰してください。お願いです！と必死に頼むのだ。「ユウ子は私だよ。ここにいますよ。」と言つても、母は首を横に振つて、家に帰して、と言ふばかりだ。ほとんど涙を見せたことがない母の目に涙があふれていた。 車は曲がることなくまっすぐ走つた。 「ああ…」と母は声を上げ、下を向いてしまった。 あの日あの日ときの母の言葉や涙を思い出すと、今も私は涙がこみ上げてくる。子供の私を心配し育ててくれたこと、そして、切れ切れの母の記憶

大石みどり(63) 横浜市青葉区(産経新聞)